

相模女子大学短期大学部

学長 風間 誠史

はじめに

2019年度における相模女子大学短期大学部の教育・研究活動等についての点検評価は、2020年3月より施行された「相模女子大学内部質保証に関する規程」に沿って実施した。まず、自己点検評価委員会において、短期大学部食物栄養学科、各事務部（以下、各機関）を単位として、大学・短大大学基準協会の評価基準に照らした点検・評価を行い、評価結果をとりまとめた後、質保証委員会において各機関に点検評価結果をフィードバックし、必要に応じて改善を指示し、PDCAサイクルが適切に運用するよう努めている。

本報告書は、質保証委員会委員長である学長の責任においてまとめたものであり、学内外に公表される。

1. 点検・評価結果の総括

上記の通り、今年度より新たな点検・評価体制のもと、IR推進室による卒業生アンケート等の分析も参考にしつつ、学科および事務部による自己点検・評価が行われ、質保証委員会でその内容を審議しフィードバックした。

食物栄養学科の点検評価結果については別添の報告書に詳細が記されているが、二年間の栄養士養成課程としてのカリキュラム運営はしっかりと行われている。その中で、大学を含めた本学の特色である社会連携活動にも積極的に取り組んでおり、教育機関としての責務は十分に果たしていると考えられる。一方で短期大学そのものが存在感を失っている社会状況があり、志願者数の減少や入学者のモチベーション低下など、困難な課題に直面しているのも事実である。

事務部による詳細な自己点検・評価は今回新たな取り組みとなった。点検・評価項目が多岐にわたり、逆に重要項目が見えにくくなっている面があり、質保証委員会として今後の課題である。それでも各項目について、各部署でいいいな点検・評価作業が実施され、本学の教育活動が全体として適切に行われていることは確認でき、一方でICT教育のための環境整備、また教職協働体制の充実という課題も明確になった。また、本学の強みである社会連携の取り組みをさらに質的に向上させるという目標も明確になったと考える。

学科および事務部において、多岐にわたる点検項目にしっかりと対応してもらったことに感謝するとともに、点検・評価結果を次に生かすいわゆるPDCAサイクルにつなげていくためには、質保証委員会を中心としたより効率的な点検・評価の仕組みの構築が課題であると感じている。今年度は試行的に2020年度前期の点検・評価も行った。コロナ禍という非常事態となり、有効性の検証はできなかったが、今後も点検・評価と質保証の効果的

な運用に取り組みたい。

＜別添＞2019年度点検評価報告書フィードバック（短期大学部食物栄養学科、事務部門）

2. Sagami Vision2020 の全体的な実施状況

学校法人相模女子大学は、創立 120 年となる 2020 年に向けて、総合的な発展計画として Sagami Vision2020 を掲げ、その実現に取り組んでいる。大学・短期大学部に係る具体的な内容は、2015 年度に提示した「中長期基本計画」に示されているが、そこでは大きく 6 つの目標が挙げられ、それぞれについて具体的な施策や改革が進められてきた。この間、ほぼ所期の目標を達成したのもあれば、社会環境等の状況の変化によって目標そのもの見直しがなされたものもある。以下にその現況を総括する。なお現在は次の中期計画（2021 年度～2025 年度）やヴィジョンを作成中である。

① 教育目標の共有と具現化

スローガン「見つめる人になる。見つける人になる。」や「発想女子」といった本学のブランドは、社会連携といった具体的な教育活動と結びつき、学内外で一定の認知を得た。

② 新しい教育体制の確立

新たな教育プログラムとして、社会起業家を育成する専門職大学院「社会起業研究科（MBA コース）」を設置し 2020 年度よりスタートした。

③ 教育課程の整備と教育内容の向上

各学科においてカリキュラムの検討が継続的に行われており、共通教育科目の新カリキュラムも軌道に乗っている。教育内容の向上に向けては授業支援システム（manaba）が完全導入され、学習成果の可視化に向けても前進した。

④ 学習環境の整備

ラーニングコモンズを設置し、その活用法を試行している。授業環境としては PC や Wi-Fi 環境の整備が喫緊の課題である。

⑤ 学生支援の充実

「夢をかなえるセンター」での学生のキャリア形成サポートは充実してきている。学生相談室、保健センターなど、学生の心身の不安に対応する態勢の整備も進めている。

⑥ 入学者増に向けた募集の戦略と戦術を策定

2018・2019 年度と、定員を超える入学者を確保し、全体としての定員充足率もほぼ 100%となっている。

以 上

2019年度 相模女子大学短期大学部
点検評価報告書に対するフィードバック

<短期大学部（食物栄養学科）>点検評価報告書

総括（200字程度）	2018年度にカリキュラム改定を実施しており、その際の見直しにより教育課程の編成・実施の方針呈示、短期大学設置基準に則った教育内容と実施体制、学習成果の測定、教育資源の有効活用は概ね適切である。社会連携・社会貢献についてはさまざまな取り組みを行っており、卓越した水準にあると考えられる。しかしながら、学習成果の獲得状況の量的・質的測定は抜本的な改善が必要である。
2019年度に認識した重点課題に対する2020年度の改善に向けた計画や目標（200字程度）	2018年度に実施したカリキュラム改定が2019年度に完成年度となることから、卒業判定、栄養士資格取得率、栄養士実力認定試験結果、卒業生アンケート等を通して総合的な評価を行う予定である。学生の受け入れについては、さらなる学生層の獲得に向けて社会人入学者に対する給付型奨学金制度の導入等を検討する。学習成果の獲得については、量的・質的データを測定する仕組みが十分でないため、その方法について検討する。
総合評価（S・A・B・C）	A

<短期大学部（食物栄養学科）>質保証委員会からの点検評価報告書に対するフィードバック

評価結果に対するコメント（200字程度）	栄養士課程を適切に運用しつつ、基礎学力の補完や幅広い教養の獲得にも配慮しており、就職状況等を見ても、栄養士養成施設としての役割を十分に果たしている。二年間という限られた時間と教育課程のなかでも、社会連携等の活動に積極的に取り組んでいることも評価できる。また学習成果の可視化へ向けてもさまざまな観点から努力がなされている。
改善事項（200字程度）	全国的な傾向として短期大学への志願者は減少を続けているが、その中で入学してくる学生に対して、学習意欲や基礎学力を高めていく必要がある。また本学の四年制栄養科学部とのより緊密な連携も求められる。
総合評価（S・A・B・C）	A

2019 年度事務部門 点検評価報告書フィードバック

【事務部門 点検評価報告書】

基準	総括	課題・改善点	総合評価
1. 理念・目的	大学の理念・目的の設定及びその公表については適切に実施している。Sagami Vision 2020 に理念・目的の実現に向けた方針を定めるとともに、認証評価の結果等を踏まえた事業計画書を策定している。	本学のスローガンや独自の取り組みについては、社会における認知度をさらに高めるための工夫が必要である。	A
2. 内部質保証	内部質保証に関する規程を制定し、全学的な体制の整備を進めている。現行の自己点検評価活動は継続的に実施されているが、評価結果に基づく改善・向上の計画的な実施に結びついていない。	2020 年度から内部質保証システムの本格運用を開始し、必要に応じて改善を進めることで、システムの精度を高めていく必要がある。	B
3. 教育研究組織	大学の目的・理念を実現するための教育組織（学部、学科、研究科）及び附置組織（子育て支援センター、教職センター）が適切に設置されている。また、教育組織の定期的な点検・評価及び社会的な要請を踏まえ、新たな専門職大学院課程の開設を決定した。	今後は、内部質保証システムによる点検・評価の結果や、社会的な要請や外部評価等を踏まえ、教育研究組織の更なる改善・向上に努める必要がある。	A

【質保証委員会からのフィードバック】

評価結果に対するコメント	改善事項	総合評価
大学の理念・目的の適切性とその周知・公表状況は総括の示す通りだが、今後の中長期の計画について、課題はあるのではないか。	Sagami Vision 2020 以後の大学の方向性についてさらに検討を急ぐ必要がある。	A
内部質保証の観点から自己点検・評価態勢の改善に取り組んでいる段階で、B 評価はまだ不十分という評価であるが、全体としては内部質保証を充実させる方向に進んでいる。	PDCA サイクルを迅速に回すために自己点検・評価の効率化が必要である。	A
学部・学科やセンター等は基本的には総括の通り適切と考えられる。専門職大学院の設置は本学の理念の展開としても、社会的要請への配慮としても積極的に評価してよい。	特にないが、今後とも学部・学科のあり方や展開について検討が必要である。	A

基準	総括	課題・改善点	総合評価
4. 教育課程・学習成果	学位授与の方針、教育課程の編成・実施方針を定め、各学位過程にふさわしい授業科目が体系的に編成されている。WEB シラバスを活用し、授業の目的・到達目標等に加え、本学の理念・目的における授業の位置づけ（見つめる科目、見つける科目）や、授業の方法（アクティブラーニング科目）を明記している。	カリキュラム改定に際しては、大学全体の視点での検証を行う必要がある。学習成果を測定するための具体的な方針や方法が明確に示されていない。授業評価アンケートの測定結果を基にした改善・向上の取り組みが十分に行われていない。	A
5. 学生の受け入れ	学生の受け入れ方針に基づき、学生募集や入学者選抜に関する体制を整備し、適切に実施している。全学入学委員会における点検・評価を行い、入学者選抜及び学生募集等施策の改善を図っている。通信制高校等出身学生を対象に、入学前・入学後に退学を抑制するための方策を講じている。	社会人入学者数を増やすための入試制度の検討や、広報手法等について検討が必要である。入試制度退学者を抑制するための対策について更なる検討が必要である	A
6. 教員・教員組織	大学の理念・目的に基づき、求める教員像を明示し、各学位課程の目的に即した教員を配置するなど適切な教員組織を編成している。全学的なFD活動として授業評価アンケート、FD研修会、授業参観を実施している。	全学的なFD活動に加え、学科の特色に応じたFD活動の進め方について検討する必要がある。大学の将来像の検討に併せて、柔軟な教員組織のあり方について検討する必要がある。	A

評価結果に対するコメント	改善事項	総合評価
点検・評価項目が多岐にわたり、また各授業の内容にまで点検・評価を求める部分があり、評価そのものが困難である。本学において3ポリシーの適切性は常に意識されており、基本的な要件は満たしていると思われる。	左記の通り、評価の視点とされているすべての項目を満たすことは必ずしも必要ではない。本学において改善をはかるべき部分は何かを明確にすべきである。	A
総括の通り概ね適切である。ただし定員充足については社会状況など外部要因に左右される部分大きい。	編入学や社会人など、入学者の幅を広げていく取り組みが必要である。	A
基本的に大学設置基準等に基づくとともに、各学科の特性やカリキュラムに即した教員組織となっており、総括の通りである。	全学共通科目など、大学全体の教育に関わる人事を検討する態勢を整備する必要がある。	A

基準	総括	課題・改善点	総合評価
7. 学生支援	学修支援と生活支援の担当部署を統合したワンストップ型窓口の開設や、ラーニングコモنزの設置等を通じて学生支援の充実を図っている。本学独自のキャリア形成支援プログラムとして、地域協働活動・ボランティア活動等の社会貢献活動や、留学・語学研修等の国際教育活動を展開している。	正課の学びを補うための補修教育プログラムについて検討・実施する必要がある。本学独自の取り組みである正課と正課外の連携に向けた具体的な仕組みの検討が必要である。	B
8. 教育研究等環境	学内におけるネットワーク環境及びICT化に係る整備については、計画的な改修に取り組んでいる。バリアフリー化への対応については、必要な設備を順次導入し、環境の整備に努めている。科研費新規採択者や不採択であっても判定により研究費の増額を行うなど研究活動を促進するための取り組みを進めている。	大学のICT化に向けた教育研究基盤整備等に関する方針の策定や、推進体制の整備が必要である。動物実験に関する外部点検評価の指摘事項に基づき、必要な改善を行う必要がある。	B

評価結果に対するコメント	改善事項	総合評価
学生支援をどこまで行えば十分なのかというのは難しいが、総括の通り概ね適切に行われている。さらに努力が必要であることは当然であるが、現状は一定の水準にあると評価したい。	4と同様で、本学においてさらに改善すべきところはどこかを明確にしたい。	A
本学の財務状況の許す範囲で、教育研究環境の整備には努力しており、概ね総括の通りである。	今回のコロナ禍対応において明らかになったように、ICT教育に関わる環境整備は優先的に進める必要がある。	B

基準	総括	課題・改善点	総合評価
9. 社会連携・社会貢献	社会連携活動ポリシーの下、市内・県内に留まらず、全国の自治体・団体との連携活動を推進した。また、各活動を学生のキャリア形成に資する活動に位置づけ、「Sagami チャレンジプログラム」として学生に示し、それらの活動に対して夢をかなえるセンターが中心となって支援を行った。	活動が広がり、プログラムが増えることで、各プログラムを維持（支援）するためのマンパワー不足を課題としている。また、今後、ポートフォリオの導入等により、学生が自身の活動や、活動によって身についた力を振り返ることができるしくみづくりを課題としている。	A
10. 大学運営・財務(1)大学運営	大学運営に必要な役職者を置き、教授会、委員会等の組織体制及び権限を明示し、適切に運営している。大学の予算編成及び予算執行を適切に行うためのプロセスや執行体制を有している。	大学教員を対象としたSDに関する方針が策定されていない。毎年の自己点検評価は実施しているが、具体的な改善には繋がっていない。	A
10. 大学運営・財務(2)財務	学園の施設設備、ICT 環境および人事計画等を反映した中長期財務計画を毎年作成し、計画性を持って予算編成を行っている。今年度も学生確保に努めるとともに外部資金の獲得にも取り組んだ結果、財務状況については、事業活動収支については、10年以上収入超過（黒字）を継続している。	引き続き、収入源の多様化に取り組むとともに、寄付金の確保、特に同窓生からの寄付金の受け入れをどう増やしていくかが課題となっている。	A

評価結果に対するコメント	改善事項	総合評価
本学が力を入れている部分であり、総括の通りであるが、より高い評価を与えてよいと考える。	量的な拡充は限界があり、質的な面でなお一層の充実をはかりたい。	S
基本的には大学運営は適切に行われているが、事務体制については検討が続けられており、教職協働についても課題がないとは言えない。	事務職員と教員がともにFDあるいはSDに取り組む態勢が必要である。	B
安定した財務基盤の確立へむけた取り組みと中長期の計画は策定されているが、社会環境の変動は予測不能な要素があり、柔軟な対応が必要である。	今回のコロナ禍に顕著だったように、予期せぬ状況が発生した際に柔軟に対応可能な体制が求められる。	A

評価 S：卓越した水準にある A：概ね適切である B：努力が求められる C：抜本的な改善が求められる